四谷の千枚田だより

第217号

四谷の千枚田絵画コンクール

入賞作品の紹介

「２０２１年四谷の千枚田絵画コンクール」（鞍掛山麓千枚田保存会・東三河郵便局主催 新城市・新城市教育委員会・新城市観光協会・奥三河観光協議会・東愛知新聞社後援）の入賞作品が決まった。

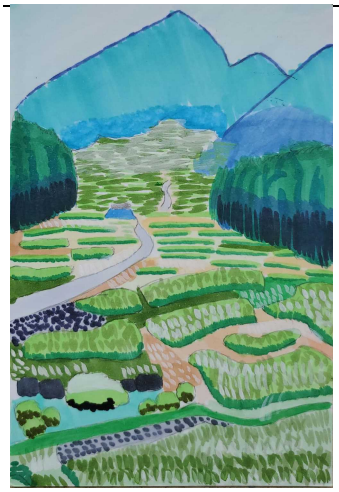
応募作品は東三河や名古屋市などの小中学生から三七八点の応募があり、最優秀賞五名、優秀賞十名、入賞三十五名を選んだ。入賞作品は十月二十六日～十一月九日まで鳳来寺郵便局、同十一日～二十五日まで新城市役所ロビー、（以下調整中）（長篠郵便局、道の駅もっくる観光案内所内（最優秀賞五名）、やまびこの丘受付ロビー、観来館で展示を予定しています。

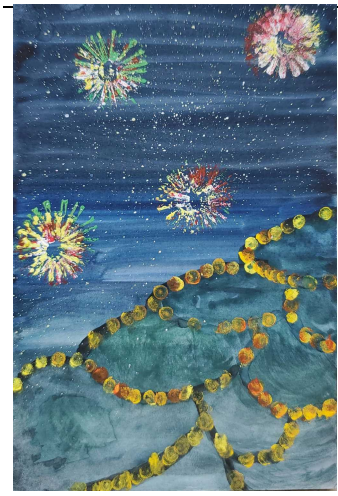
入賞者（敬称略）

【最優秀賞】鈴木咲都（豊橋市つつじが丘小二年）菅谷美羽（新城市鳳来中部小三年）伊藤実結（新城市東郷西小五年）垂水愛華（豊橋市大成中学三年）原田華乃（新城市 鳳来寺小四年）**【優秀賞】**白谷敦志（田原市清田小一年）小池月愛（新城市鳳来寺小二年）原田和（新城市鳳来寺小一年）藤原麻里衣（新城市黄柳川小四年）原田遼正（新城市作手小二年）丸太京佳（豊橋市高豊中一年）岡本來夢（新城市鳳来中二年）木本明希（豊橋市多米小五年）白谷心美（田原市清田小三年）鈴木美柚里（新城市東郷中二年）**【入賞】**松宮帆希（新城市東郷東小四年）佐藤穂波（豊田市松平中一年）中野樹（新城市鳳来中部小四年）瀧川凌矢（新城市東郷東小六年）原田一生（新城市鳳来東小三年）安形有生（新城市八名中二年）阿比留ゆきえ（新城市新城小六年）高山星空（豊橋市栄小五年）大内未来（新城市鳳来中部小五年）城丸美憂（豊橋市多米小四年）渡邉來桜（新城市作手小二年）高橋心都（岡崎市藤川小五年）鈴木小遥（豊橋市二川小五年）野口耀（新城市鳳来中部小五年）金沢花音（愛知教育大学付属岡崎中三年）菅谷陽輝（新城市鳳来東小四年）種村心（新城市八名中二年）梶村彩羽（新城市鳳来寺小五年）清水槙宥（新城市東郷東小二年）稲垣咲希（新城市東郷東小六年）岡本莉來（新城市東陽小五年）神田航輝（知多郡武豊小五年）鈴木咲那（新城市東陽小一年）瀧川尋盛（新城市東郷東小六年）長岡藍丸（新城市東郷西小一年）朝倉結菜（豊橋市植田小三年）星野奈々（豊橋市幸小六年）原田柚季（新城市鳳来東小六年）内野結奈（豊橋市東田小六年）山本桃愛（新城市八名小五年）鈴木結菜（名古屋市香流小一年）鈴木ことは（新城市鳳来中部小五年）半田貴一（新城市千郷小三年）鈴木みのり（新城市東郷東小二年）石山優羽（豊橋市飯村小五年）

入賞商品は本年度新米・図書券・五平餅セットほか多数をお届けします。

四谷の千枚田絵画コンクールにあたり、ＮＰＯ法人国内産米の粉伝統食文化推進ネットワーク 八雲だんごでお馴染みの(株)丸八製菓さんの多大なご協力を頂き開催しております。





鳳来寺小学校の稲刈り

九月十八日、読売新聞記事抜粋

「四谷の千枚田」稲刈り挑戦

鳳来寺小の五年生十人

農林水産省の「棚田百選」に選ばれている新城市四谷の「四谷の千枚田」で黄金色に輝く稲穂の刈り取り作業が行われている。

鞍掛山の斜面に広さ三・六㌶、高低差二百㍍にわたって棚田四百二十枚が広がる。鞍掛山麓千枚田保存会によると、五月に県産ブランド米「ミネアサヒ」を植え付け長雨や日照不足もあり成長が心配されたが、今月初めから収穫が始まった。

十六日には市立鳳来寺小学校の五年生児童十人が総合学習の一環として稲刈りに挑戦し、保存会の小山舜二会長の指導を受けて、稲を鎌で刈り取り束ねていた。

梶村彩羽さん(十一)は「たくさん実って嬉しかった」と初めての稲刈りを楽しんでいた。

稲作体験　脱穀

十月七日、豊橋調理製菓専門学校(二十七名)は千枚田の実習田で脱穀を行った。

五月の田植え、六月の田の草取り(梅取り)、稲刈りは雨天のため中止、そして脱穀と、一連の稲作体験が実施された。

将来、「食のプロ」を目指す学生たちに、食の原点はコメであり、稲作体験(労働)から、一粒のコメの大事さ、大切さを学ぶことができたら、嬉しいと諭した。

大人の勉強会　歴史と継承

九月十九日、千種座(名古屋市)において日本の伝統文化をつなぐ実行委員会主催(文化庁地域文化財総合活用推進事業)の「歴史と継承」が開催された。当日の様子は十月一日からユーチューブで動画配信、小山舜二も千枚田で動画撮影、編集されたものがみられる。

関連事業で十月九日～二十一日までソニーストア名古屋において「新城市四谷の棚田」と題して写真展も行われている。

げなげな噺

夜な夜なニホンジカの鳴き声がうるさい。

日々、朝の散策仲間小山秀夫との会話で、イノシシに代わってニホンジカが栗まで拾って食べるようになった…。トゲだらけのタラの木も棘ごと食べてしまい、胃は大丈夫か…、食うものがイノシシに似てきたから肉もイノシシのように旨くなったづらか?…など、たわいのない話に盛り上がる。

里の畑には美味しいものが一ぱい作ってあるし、人間の作ったものは野山の木の皮や草より、やっぱり美味いと、味を占め、手あたり次第に食い荒らしている。

そこで、試しに箱檻に餌として「桑の枝葉」を吊るしておいたところ、見事、捕獲に成功した。

「千枚田だより」を書いている今も、前の山でヒュ～…ヒュ～と仲間同士が明日の打ち合わせか?、呼び、叫んでいる。

発　行　令和三年十月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文　責　小山舜二